

～眼科（屈折・眼位）検査のご案内～

弱視・斜視の早期発見のため、屈折・眼位検査を行います。

屈折・眼位検査はなぜ必要？

視覚は6～8歳くらいでほぼ完成します。

6～8歳くらいまでに正しく発達しなければ、弱視（メガネやコンタクトをしても視力がでないこと）になってしまいます。

弱視や斜視（片目の視線がずれていること）は早期発見、早期治療がとても大切です。

しかし、乳幼児は見えにくさを自覚していないことが多く、家族も気づきません。

屈折・眼位検査は弱視、斜視、眼疾患の早期発見に役立ちます。

屈折測定機器とは？

目のピントが合うために必要な度数（屈折）を調べる検査です。

屈折は、正視・近視・遠視・乱視に分かれます。

視力検査だけでは目の異常を見逃してしまう恐れがありますが、この検査をすることで、視力の発達を妨げる原因がわかることがあり、異常の見逃しを減らすことができます。

健診で使用している機器では、角度の大きな斜視も調べることができます。

（角度の小さな斜視や、間欠性斜視は調べることができません。）

* 器械での測定にはある程度誤差や限界があることをご理解ください。

屈折検査で異常を指摘されたら

眼科を受診して精密検査を受けましょう。

精密検査では、視力・屈折・眼位・角膜・水晶体・眼底などに異常がないかを調べます。

子どもの目の病気は本人が不自由を訴えないことが多く、治療が手遅れになってしまう恐れがあります。

見え方に問題がないようでも、必ず眼科を受診しましょう。

<検査の様子>

